児童文学から〈未来〉へ ③

「銀河鉄道の夜」と物語読解の「ルール」

井上乃武

1 「真実」は何か？

宮澤賢治「銀河鉄道の夜」を読んでいて不思議に思うことがある。一つは、なぜカムパネルラはサウザンクロスで銀河鉄道から降りなかったのか、もう一つは、彼の失踪を経て〈現実世界〉[1]へと戻ったジョバンニが感じた「そのカムパネルラはもうあの銀河のはづれにしかゐないといふやうな気がしてしかたなかったのです。[2]」がなぜ真実ではないかのように取り扱われているのか、ということだ。

作中にカムパネルラが川に落ちたザネリを助けようとして死んでしまったことをほのめかす内容が存在すること、そして、列車に乗り込んできた死者たちがサウザンクロスで下車したことを考慮すれば、例えば、ジョバンニと別れがたいがゆえにサウザンクロスを乗り越してしまったカムパネルラが石炭袋で銀河鉄道を強制的に下車させられた、という読解はけっして不自然ではない。だが、この読解が成立するためには、いくつかの条件を満たす必要がある。

それは、具体的には、①〈現実世界〉と〈銀河鉄道の世界〉の間にある種の連動性が成り立つこと、②この連動性を体現する「死に関するルール」の存在、③〈銀河鉄道の世界〉に対する〈現実世界〉の優位性、である。①が成り立たなければ、カムパネルラがいくらおっかさんに申し訳なく思ってもそれは〈現実世界〉における彼の死には結びつかないし、②が成り立つことによって、〈銀河鉄道の夜の世界〉は「死」を媒介して〈現実世界〉と結びつけられる。だが、「銀河鉄道の夜」の改稿の過程で浮上してくる相対主義の問題は、この二つの条件がカムパネルラの死の根拠としては薄弱なものであることを示し、これらに代わる第三の条件を要請する。

この相対主義の問題は、後期形三における「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」の演説の主題である。カムパネルラの失踪に動揺したジョバンニのもとに現れたこの人物は、彼を落ち着かせたうえで、地理と歴史の